高知県立文学館ニュース

KOCHI LITERARY MUSEUM NEWS

高知県立文学館

藤並の森

Vol.86

リレー随筆

夢はどんどん変わっていくもの

島本　須美

高知で暮らしたのは高校を卒業するまで。子供の頃の夢は何だったかなぁ。当時テレビで見たスチュワーデスってカッコいいなぁなんて思ったり。でも、「歌が上手やねぇ」と褒められれば歌手もいいなぁと思ったり。今の子供達は何を夢見ているのかしら…。

スポーツや音楽、将棋や囲碁等、才能ある若い人達が早くから頭角を現している昨今、後に続けと同じ夢を見ている人も多いでしょうね。自分が何をやりたいかが早く見つかれば、それだけ必要な勉強に打ち込める筈。

例えば、スポーツ選手を目指すのであれば、まずは体力づくり。私は子供の頃、高知の野山を駆け回り、いたずりを採ったり野いちごを食べたり、夏には鏡川で泳いだりと、自然の中での体力づくりに励んでいました（遊んでいただけ）

運動は得意でしたが、プロを目指す程の実力はありませんでした。

私は、最初から声優を目指していたのではありません。高校演劇をやっていたので、演じる事の楽しさから女優になろうと思ったんです。そして上京し、役者の基礎である発声、声楽、日舞、狂言、バレエ、マイムｅｔｃ。朝から夕方までみっちりのカリキュラムを勉強しました（時々サボりました）

そして劇団に入ったのですが、先輩から言われたのは「役者は待つのも仕事！」仕事が入るのを待ち、現場に行っても出番まで待ち。給料制ではないので、殆どの日はアルバイトでした。

役者の仕事の一つとして始めた声の仕事。1年目に『ルパン三世～カリオストロの城～』でクラリスという役を演じさせていただきました。宮崎駿監督の長編アニメ一作目です。その後『風の谷のナウシカ』『小公女セーラ』ｅｔｃと続き、いつしか声優と呼ばれるようになっていました。

もし声優を目指す人がいるのならば、今のうちに沢山の本を読んで読解力を高めておいた方がいいでしょう。その為に必要ならば漢字の勉強をしておく事も大事ですよ。

夢と現実という意味でいえば、スポーツ選手には体力的なリミットがあり、芸能関係はデビューまで行けるか、そして生き残れるかという不安が。これはどの職業でも同じかもしれませんね。

でも、夢はどんどん変わっていくもの！きっと最終的な夢は『家族の幸せ』に行き着くのではないかしら。楽しい人生を！

（声優）

▲デビュー当時の島本須美さん
声優としてこれまでにも多くの作品に出演し、今年デビュー40周年を迎える。
高知県観光特使の一人でもあり、今秋、リメイク版アルバムが発売予定。

島本須美さん 記念講演会開催！

日時　11月24日（日）午後2時50分～（予定）

詳細は裏表紙の朗読コンクールご案内をご覧ください。

注目の企画展ご紹介します！

みんなだいすき！

はたらくのりものだいしゅうごう!!

～えほんのせかいへしゅっぱつしんこう～

令和元年 7月13日(土)→9月8日(日)　9:00～17:00（最終入館 16:30）

▲展示の様子。手動ベルトコンベアーで荷物運びのコーナー

7月13日からはじまった「みんなだいすき！はたらくのりものだいしゅうごう!!～えほんのせかいへしゅっぱつしんこう～」では、連日たくさんのこどもたちの笑い声が響きわたっています。

展示のコンセプトは、「さわってあそべる！」「かぞくみんなでたのしめる！」「絵本がもっとすきになる！」。小さなこどもたちが大好きな、働く乗り物の絵本の世界を、大型パネルや体験型展示でご紹介しています。

展示室では、大きな段ボールショベルカーがお出迎え！こびとたちが工事車両を駆使してケーキを作る『おたすけこびと』（徳間書店）のコーナーでは、特大ケーキに飾りつけをして、まるで絵本の世界に入ったように楽しむことができます。

『新幹線のたび～はやぶさ・のぞみ・さくらで日本縦断～』（講談社）のコーナーでは、新幹線はやぶさに見立てたブースの中の窓枠を覗くと、『新幹線のたび』のパノラマイラストが広がっています。

『はしれ！たくはいびん』（偕成社）のコーナーには、物語の中の荷物の届け先の玄関を再現。宅配便業者の制服を着た小さな宅配便やさんが、りんごの箱を届けてくれていました。

一番人気は、「はたらくのりものゆめタウン」。『パトカーぱとくん』（福音館書店）の警察署や、『おはよう！しゅうしゅうしゃ』（偕成社）のごみ集積場など、絵本の世界をイメージして作ったジオラマで、こどもたちは、自由にミニカーを動かして、自分だけの物語をつくり、遊んでくれています。

また、関連イベントの『おたすけこびと』の挿絵画家コヨセジュンジさんのワークショップや『新幹線のたび～はやぶさ・のぞみ・さくらで日本縦断～』の作者コマヤスカンさんのトークショーを開催。多くのお客様が来場され、楽しんでいただくことができました。

最終日には、ファイナルイベントとして、「はたらくのりものゆめタウン」のミニカーや展示した絵本をプレゼントします。最後まで「はたらくのりものだいしゅうごう!!」展をお楽しみください。

最後になりましたが、開催にあたり格別のご協力を賜りました、コヨセジュンジさんならびにコマヤスカンさんはじめ、各作者・出版社の皆さまに心より感謝申し上げます。

また、展示やイベントでご協力を賜りました、国際デザイン・ビューティカレッジ 建築・インテリアデザイン科様、コマツカスタマーサポート高知支店様、四国建設センター株式会社様はじめ、ご協力いただきましたすべての皆さまに厚く御礼申し上げます。

（学芸課／岡本美和）

「本を読む」ことはただ文字情報だけを取り入れているのではありません。

私たちは「本を読む」時に、知らず知らずに文字から発生する言葉の響き・パワー・温度といった〝言葉の生命力〟に触れています。

9月から開催する「言葉のチカラ、声の魔法展」は、その「言葉の力」をテーマにした展覧会です。日々の暮らしの中で、気が付けば同じような言葉しか使っていない…そんな方にぜひご覧いただきたい内容となっています。

■「言葉を楽しもう！」コーナー

ロビーには、読書の歴史、読書の効能、さまざまな種類の言葉あそび、高知の作家の名言などを設けました。自分で考え、発声するコーナーもあり、言葉の多様さ・面白さを感じていただけます。また、来館者の皆さんから「わらべうた」「あそびうた」を募集するコーナーも設けました。皆さんから集めた「うた」は高知県出身の作家・中脇初枝さんにお届けします。

■「ひろがる文学表現」コーナー

誰もが自分を支える名言や、「好き」と感じた本を持っています。それは作家が自分の思いを言葉にのせ、読者の心を揺さぶった証です。しかし、その陰には、一文字の表現にも気を配る作家ならではの不断の努力がありました。

このコーナーでは、改めて文学作品の〝表現〟に注目し、「恋」「人生」「決めゼリフ」などテーマごとに分けて、言葉を自在にあやつる作家たちの凄さに迫ります。

■表現のプロフェッショナル！「声優のお仕事」コーナー

高知県出身の大人気声優・島本須美さん、小野大輔さんにご協力いただき、「声」ですべてを表現する声優のお仕事を紹介するコーナーを設けました。

声優を続けるうえで大切にしていることや、言葉との向き合い方など、第一線で活躍し続けるお二人ならではの視点にご注目ください。

展示をご覧いただきながら、どんな文学表現に惹かれたか、どんな言葉に共感したか、どんな声に聞き惚れたか、を皆さまの心に留めていただければと思います。新しい文学作品との出会いの場となるよう準備を進めておりますので、ぜひお越しください。

（学芸課／福冨陽子）

常設展虫めがね

シリーズで変わる常設展をご紹介！

常設展示を入れ替えました！

【反骨の大衆文学コーナー】田岡典夫から浜本浩へ

浜本浩は１８９０（明治23）年、松山市生まれ。浅草での経験を糧に作家としての才能を開花させ、浅草を描く作家として人気を博しました。直木賞候補に６回選出。直木賞選考委員としても活躍した人物です。

浜本は、１８９６（明治29）年、父親の転勤で高知県へ移住。高知県内で過ごした後、京都の同志社中学へ転校。その頃、雑誌「中学世界」と「文章世界」を愛読し、投稿をし始めます。

18歳の頃、単身上京。画家・竹久夢二と出会います。夢二を介してたくさんの友と出会い、浅草で青春の日々を過ごしました。

大正８年、雑誌「改造」の記者となり、京都支局の駐在員として抜擢。浜本の人柄と仕事ぶりが認められ、「改造は京都で編集している」と言われたほどの活躍でした。

▲展示の様子

作家生活に入ったのは40歳を過ぎた頃。記者時代の経験を活かし、作家としての才能を発揮し始めます。自身の人生の中で最も印象的な時代と場所と友人を題材にロマンチックな作品を描こうと思い至り、浜本の重要な作品群である〝浅草もの〟が誕生しました。

その後、浅草を描く作家として定着した浜本ですが、土佐への愛も持ち続け、相当数の土佐を舞台とする作品を執筆。また、土佐文人たちを主とする「南風会」を発足し、雑誌「南風」を創刊するなど、高知県の文学の発展にも力を尽くしました。

今回は、浜本の人生の中で重要な時代を４部構成で展示。私生活や作風に多大な影響を与えた地・浅草での友人たちとの関わりが窺える、第１部「浜本の青春と友人たち」。第２部「改造記者時代」では、科学者・アインシュタインとの写真などを紹介。第３部「心の故郷・浅草」では、浜本が「〝浅草もの〟は心の故郷・浅草へのラブレター」と称するほど愛情を捧げた浅草を舞台とする作品を紹介。第４部「土佐を愛した浜本」では、草稿や土佐文人たちとの交流が窺える資料を紹介しています。

淡々とした筆致で、浅草で織り成す人間模様や土佐人のもつ激情性を描き出し、浅草と土佐への愛情を表現した浜本。浜本の作家人生の中で浅草と土佐がいかに重要な場所であったかを感じていただければと思います。

（学芸課／檜垣佳甫）

【現代の文学コーナー】田宮虎彦から坂東眞砂子へ

坂東眞砂子は１９５８年高岡郡佐川町に生まれました。土俗的な作品や怪奇小説から始まり、「死」と「性」を主題とした多くの作品を書きました。丁寧な取材に裏打ちされたプロットと重厚な作品世界に加え、鬼気迫る筆致は、今もなお読者を魅了しています。

高知、四国の伝説に根差した作品も多く、「死国」「狗神」は映画化されました。土佐に伝わる桃色珊瑚の伝説を下敷きにした「桃色浄土」では、珊瑚に魅せられた人々の心に潜む欲、人間臭さを大胆に描きつつ、男女の心、葛藤を巧みに描いています。

坂東は高校までを高知ですごし、奈良女子大学の家政学部住居学科に進学します。卒業後は刺激を求め、かねてから興味を持っていたイタリアに留学。ミラノ工科大学などで、インテリアデザインや舞台美術を学びました。

イタリアからの帰国後、フリーライターとしてエッセイや児童文学作品を精力的に執筆しはじめます。絵本作家・寺村輝夫主宰の雑誌「のん」に投稿を始めたのもこの頃です。「イタリア女の探しもの」が第１回ｎｏｎ－ｎｏノンフィクション賞を、「ミルクでおよいだミルクひめ」は第７回毎日童話新人賞優秀賞を受賞するなど、児童文学作品としても、一定の評価を受けています。

その後、「桜雨」で島清（しませ）恋愛文学賞、１９９７年には「山妣」で第１１６回直木賞を受賞します。風景や描写力、筆力が審査員を唸らせました。「蛇鏡」で第１０１回の、「桃色浄土」で第１１２回の直木賞候補を経ての受賞でした。

２００２年自身初の自伝的小説ともいえる「わたし」を出版。幼少期の思い出、祖母の死、友人とのいさかいや憂鬱、恋人との生活などを書き綴りました。

坂東さんの作品は、精緻な描写と日常に潜むホラー展開、心の底に潜む欲を浮き彫りにしているところが魅力のひとつといえます。確固たる信念をもち、亡くなる直前まで執筆を続けましたが、「眠る魚」未完のまま、２０１４年に惜しまれながら亡くなりました。

今回の展示では、文学賞を受賞した作品や、執筆の際の取材写真や書簡などをご紹介します。学生時代に描いた漫画の原稿やスケッチなどが初公開となるほか、知られざる児童文学作品についても触れたいと思います。展示にあたり、関係者への取材で新たに見えた一面を、みなさまに知っていただければと思います。

（学芸課／野々村昭美）

▲取材の様子（提供／公文　豪氏）

土佐文学さんぽ 84

桑名古庵の「土葬」墓

高橋　正

土佐人二世田中英光（大2～昭24）の名作『桑名古庵』（昭22）の主人公、医師・桑名古庵は土佐山内藩政初期の実在人物。古庵は若い頃、家族ともども受洗、切支丹だったがすぐ棄教。16年経って訴人があり、一族すべて隠れ切支丹の容疑で捕縛、入籠、拷問の憂き目に遭い、次々と籠死。古庵も幽囚47年の後、元禄2年（1689年）12月20日籠死、享年83歳であった。

英光の『桑名古庵』は、ほぼ史実に沿った歴史小説で、「いくらか創作的に書いてみた」と作中にある。島原の乱後の苛酷な切支丹迫害の犠牲者である桑名古庵の生涯を描き切った作品。そのモチーフは「封建政治に対する厳しい批判」である。「ちょっと鴎外ばりの史伝小説みたい」（伊藤整）など、高く評価されている。

高知市の北郊、西久万の高野谷に、将棋の駒形の高さ一・二メートル、幅四十センチ程の古庵の墓石が荒草の中にひっそりと建っている。碑面には、「桑名古庵土葬墓」の文字がくっきりと刻まれている。

右隣には、ひとり娘てうと弟休務の娘久の駒形の墓石が仲良く並んで建っている。側の説明板には、「『土葬』とわざわざ銘記しているのは罪人ではなく『ころびキリシタン』として埋葬したといえる」とある。

藩政初期、慶安4年（1651年）以降、一般人は「土葬」、罪人は「火葬」の令が厳守されていた。

（高知高専名誉教授）

▲高知市西久万高野谷の桑名古庵の土葬墓

資料受贈報告

―寄贈資料から―

『あそびうたするものよっといで』
中脇初枝編著　ひろせべに絵
福音館書店刊　2019年4月　72頁
中脇初枝氏寄贈

中脇初枝さんは1974年徳島県生まれ、高知県育ちの作家。児童虐待をテーマに書いて反響を呼んだ『きみはいい子』をはじめ、戦争を題材とした『世界の果てのこどもたち』『神に守られた島』等、重い題材を丁寧に描き、多くの人の心を捉えています。

一方、子どもの頃から昔話に親しみ、大学で民俗学を学んだ中脇さんは昔話の再話も手がけ、四万十川流域に伝わる昔話をもとに『ちゃあちゃんのむかしばなし』、日本各地の昔話をもとに『女の子の昔話』等の本にまとめています。

今回ご紹介する『あそびうたするものよっといで』も口伝えに親しまれてきたあそびうたの数々を編んだ一冊。「だるまさんがころんだ」のようなお馴染のかぞえうたもあれば、全く知らないもの、自分が知っているうたと少し違うものと実に様々なうたがあることに驚きます。巻末の解説によると、平安時代以来の伝統的なうたがある一方で、時代とともに子どもたちによって新しく作られたり、各地で独自に発展したりといった変遷があり、地域差が見られるうたもあるとのこと。言葉の世界の豊かさ、おおらかさを感じます。

中脇さんには本書と同時刊行の『あそびうたするものこのゆびとまれ』もご寄贈いただきました。どちらもひろせべにさんのユーモラスな絵と相まって、ページを繰る度に笑みがこぼれます。中には思わず声を上げて笑ってしまううたも。家族で、友だち同士で楽しんでほしい絵本です。

なお、秋の企画展「言葉のチカラ、声の魔法展」ではわらべうた等を募集し、中脇さんにお届けすることを計画しています。ぜひ皆様のとっておきのうたをお寄せください。

（学芸課／小松路代）

受贈報告（令和元年5月～7月）敬称略

▼**宮尾　環**・「宮尾登美子愛用の珊瑚帯留」他
▼**熊谷さやか**・「星の王子さま　倉橋由美子訳サン＝テグジュペリ著　文藝春秋刊」
▼**橋田憲明**・「俳句界 25巻7号　文學の森編刊」
▼**千葉俊二**・「アジア・文化・歴史 10号　アジア・文化・歴史研究会編刊」
▼**小松弘愛**・「東北詩歌集－西行・芭蕉・賢治から現在まで　鈴木比佐雄他編　コールサック社刊」
▼**林　嗣夫**・「詩集 洗面器　林 嗣夫著　土曜美術社出版販売刊」他
▼**根津真介**・「詩集 否　根津真介著　土曜美術社出版販売刊」
▼**斉藤直子**・「子規はずっとここにいる　根岸子規庵春秋　さいとうなおこ著　北冬舎刊」
▼**『新青年』研究会**・「『新青年』趣味 19号　『新青年』趣味編集委員会編刊」
▼**高知県立大学**・「大学的高知ガイド－こだわりの歩き方　高知県立大学文化学部編　昭和堂刊」

100年文学展レポート

「時と空間を超えて、懐かしい記憶を呼び起こす」をテーマとし、大正末から平成まで100年の高知の文学を振り返り開催された「高知100年文学展」。

香りを嗅ぎながら文学作品を楽しめるコーナーや、高知の懐かしい風景写真が好評でした。さらに展示室では、寺田寅彦や田岡典夫の初公開原稿、普段の展覧会ではなかなか出せない田村泰次郎や三浦朱門などの貴重な資料を展示。内容が濃いと評価いただきました。

イベントでは河野初江氏をお招きし、「感動体験！一枚の自分史を作ろう」を開催。一人ひとりがかけがえのない思い出と向き合い、古い写真から自分史を作り上げました。元ソーレ館長の古谷滋子氏をお招きした「おはなし会」は、『高知の女性の生活史　ひとくちに話せる人生じゃあない』の編集こぼれ話を拝聴。当館カルチャーサポーターの朗読を組み合わせたところ、当時の女性の気持ちをより深く知ることができたと嬉しい声をいただきました。その他イベントも好評でした。

高知県の100年の文学を資料とともに振り返ることで、文学の流れを整理できただけでなく、高知県の文学の層の厚さ、文学の変容などを改めて知ることができました。今後も、さまざまな角度から高知の文学を検証する試みを続けていきたいと思います。

（学芸課／川島禎子）

▲おはなし会様子

文学館のお宝大公開

～世界・日本の巨星～コーナーのご報告

1997（平成9）年11月2日に開館した文学館は、資料の所蔵点数が7万点を超えました。その中には、夏目漱石、川端康成、井上靖といった日本を代表する作家の肉筆資料やロマン・ロランといった世界の文豪からの書簡なども含まれています。

これらの資料は、「文学館のお宝」として、常時収蔵庫に収められていますが、今年は、今上天皇即位を記念し、平成から令和にかけてのゴールデンウイーク期間中に、常設展示室内にコーナーを設けて紹介。好評を博しました。

なお、主な展示資料は左記の通りです。

①川端康成　草稿　雑誌『風景』連載「一草一花」「落花流水」
②井上靖　草稿「天平の甍の読み方」「騎馬民族説と私」
③夏目漱石　書簡　寺田寅彦宛「やもり物語　評」
④与謝野晶子　書簡　馬場孤蝶宛
⑤竹久夢二　書簡　幸徳秋水宛
⑥室生犀星　書簡・武者小路実篤　書簡　小山いと子宛
⑦ロマン・ロラン書簡　上田秋夫宛（ロランの父親の死を知らせる内容のもの）など

（学芸課長／津田加須子）

有川さんコーナー入れ替え

高知を愛する有川ひろさんが、今年、文学館に貴重な資料を寄贈してくださいました！

頂いた資料をさっそく皆様に見ていただくために、有川ひろさんのコーナーの入れ替えを行い、2019年5月18日より公開しています。展示はすべて新資料となっております。

ベストセラー作品に贈られる特装本や「県庁おもてなし課」台本など、なかなか見ることのできない資料を是非ご覧ください。

（学芸課／川島禎子）

ショップより

毎年恒例の夏休み企画展、今年は「みんなだいすき！はたらくのりものだいしゅうごう!!」。

ミュージアムショップでも、のりものえほんやグッズを揃え、元気いっぱいの小さなお客さまでショップは連日賑わいました。

9月21日からはじまる「言葉のチカラ、声の魔法展」では、視覚で楽しむ文字のデザイン本や、美しいことば、子どもに聞かせたい絵本など、ことばや文字、書くことに関連した書籍を取り揃えてお待ちしています。

話題の「ことば選び辞典」シリーズなども入荷予定です。ふだん日常で浮かんでは消えるさまざまな思いをことばで表現してみると新たな発見があるかもしれませんね。

そして当館オリジナルキャラクター、しおりちゃんとヤイロチョウの筆太（ぴった）の缶バッチやマグネットもたくさん出来ました。文学館ご来館のお土産にもオススメです。

是非、ショップにもお立ち寄りください。

（総務事業課／髙橋敏江）

館長室から

夏の主役

例年より遅く訪れた今年の梅雨も明け、夏休みとともに今年も夏本番がスタートした。文学館は樹木に囲まれたお城の公園内にあるので、セミの声が日々その勢いを増してきている。

「夏の主役は誰？」と問われるとみなさんは何を思い浮かべるだろう。曰く、セミ、カブトムシ、花火、お祭り、スイカなどなど。

文学館にとっては「小さなお客様とそのご家族」となる。9月上旬まで開催中の企画展「みんなだいすき！はたらくのりものだいしゅうごう!!」は、毎日小さなお客様とそのご家族で賑わっている。

小さなお客様は男の子も女の子もみんな乗り物が大好き。そして乗り物の絵本も。

今回展示している多くの乗り物の絵本は、半世紀近くの時を越えてなおそのきらめきを放っている。絵本作家の方々の子どもに向けた優しいまなざしとともに。

さて、展覧会の展示物といえば手を触れないことが常識。でも、今回の企画展では大胆にも、可能な限り自分の手で触れて動かすことの出来る、体験できる展示でいっぱいにするという新たな試みに挑戦してみた。

なぜなら、小さなお客様は、まず絵本を読むご家族のやわらかい声、目に映るあざやかな色彩から絵本の世界に出会う。そして、乗り物の絵本であれば、主人公となった自分がおもちゃの乗り物を動かすことで、その世界の楽しさが格段に広がると思うから。

絵本のなかで言葉や絵にふれ、そして自分の手でその世界を体験し、その世界に入っていく充実感を通じて、小さなお客様の創造性が大きくひろがっていく。

この夏も、主役である小さなお客様には、五感を活かした体験をたくさんして欲しいと願っている。

（岡﨑順子）

文学マイスター講座

高知ゆかりの詩人をテーマに好評開催中！

今年度のマイスター講座は4月に開講し、初回は猪野睦氏が生涯研究していたプロレタリア詩人・槇村浩や、高知出身の詩人・岡本弥太、島崎曙海などについて、5月以降は、清岡卓行・岡本弥太・やなせたかしについて講義いただきました。8月は槇村浩、9月は大江満雄についての講義を開催します。

10月からは、高知の現役詩人・小松弘愛氏、林嗣夫氏、萱野笛子氏などが登壇します。詩の誕生の過程や表現の奥深さなどを、じっくり味わっていただければと思います。受講希望の方は、前日までに文学館までお申し込みください！

（学芸課／野々村昭美）

▲講義のようす

開講スケジュール

各回第４土曜日 14:00～15:30

※12月は休館のため休会

【第５回】	8月24日 「槇村　浩の反戦詩を中心に」／藤原義一　氏
【第６回】	9月28日 「大江満雄とハンセン病者の詩」／木村哲也　氏 ※この回のみ、会場が「高知城ホール２階　中会議室」に変更となります。
【第７回】	10月26日 「小松弘愛　自作を語る」／小松弘愛　氏
【第８回】	11月23日 「林　嗣夫　わが詩を語る―この世のふしぎ、ということ」／林　嗣夫　氏
【第９回】	令和２年１月25日 「長尾　軫　自作を語る　愛この頃」／長尾　軫　氏
【第10回】	令和２年２月22日 「萱野笛子　詩が生まれる時」／萱野笛子　氏
【第11回】	令和２年３月28日 「鈴木義夫　自作を語る」／鈴木義夫　氏

高知県立文学館ニュース　第86号　令和元年8月31日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX 088-871-7857

高知県立文学館　カレンダー

イベント情報

2019(令和元)年度
第22回児童生徒文学作品

朗読コンクール ご案内

小中学校が夏休みの８月は、当館主催「児童生徒文学作品朗読コンクール」の地区審査真っ最中、児童生徒の皆さんの熱い朗読コンクールシーズンです。練習を積み重ね、ご自分の朗読を追求して、一人ひとりが地区審査に臨まれます。そうして紡ぎ出される表現豊かな朗読は、聴く側の私たちにも、新鮮な気持ちを呼び起こしてくれます。11月には県審査も開催されますので、ぜひ、児童生徒の皆さんの熱心な朗読を聴きに来てください。　(学芸課／道脇夕加)

県審査(公開)・記念講演会

会　場　高知県立文学館 1階 ホール

日　時　11月24日(日) 午後1時～

■各地区審査より選出された児童生徒が県審査に出場します。

■特別審査委員として**島本 須美さん(声優、高知県出身)**をお招きし、記念講演会を開催します。

文学マイスター講座

●第６回（令和元年9月28日）
演題　「大江満雄とハンセン病者の詩」
講師　木村 哲也　先生(国立ハンセン病資料館　学芸員)
参加無料・事前に申し込みが必要です。
※この回のみ、会場は高知城ホール２F 中会議室(高知市丸ノ内2丁目1-10)となります。

展覧会案内

企画展案内

みんなだいすき！
はたらくのりものだいしゅうごう!!
～えほんのせかいへしゅっぱつしんこう～

会　期　令和元年 7月13日(土)～9月8日(日)
午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日　会期中無休
場　所　高知県立文学館　2階企画展示室
観覧料　500円(常設展含む)　高校生以下無料

次回企画展予告

企画展
言葉のチカラ、声の魔法展

会　期　2019(令和元年) 9.21(土)▶11.17(日)
午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日　会期中無休
場　所　高知県立文学館　2階企画展示室
観覧料　500円(常設展含む)　高校生以下無料
20名以上の団体は2割引

思いを相手に伝える一番身近なツールである「言葉」をテーマに、「声」「音」「デザイン」といったさまざまな角度から「言葉の力」を検証していきます。
本展で、改めて言葉の力を実感し、魔法にかかったような不思議なひとときをお過ごしください。

誰もが表現者！「耳和(なぐ)2019」

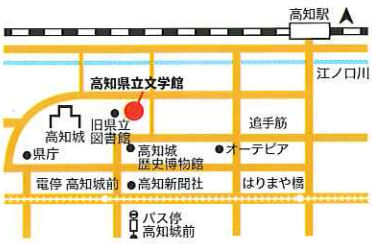
好きな作品を思い思いに朗読しよう。参加者募集中です。

開催日　10月13日(日)
朗読時間　1組10分以内（10分で終わるよう、文学作品をお選びください）
朗読前に、「何故この作品が好きか」をお話ください。
参加費　無料
募集人数　10組前後(5組以上の参加者が集まらない場合はイベント中止となります。ご了承ください。)
募集期間　2019年7月1日(月)～9月6日(金)必着
開催時間　午後1時～3時50分(予定)
申　込　応募要項への記入が必要です。詳しくはお問い合わせください。
規定等　展覧会の趣旨にあわせ、「文学作品」であれば朗読スタイルは原則自由。
不適切なカット・つなぎなど、作品に手を加える行為は不可とします。

利用案内

開館時間　午前９時～午後５時（入館は、午後４時半まで）
休館日　年末年始（12月27日～１月１日）を除き、無休。
※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料　一般360円　企画展はそれぞれ異なります。
20人以上の団体は２割引。高校生以下無料。
高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病手帳又は被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者１名は無料です。
駐車場　なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備　ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設　企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



●高知龍馬空港より空港連絡バス<県庁前行>「高知城前」下車、北へ徒歩５分または<高知駅行>「北はりまや橋」下車、徒歩 20 分
●JR 高知駅下車、徒歩 20 分(または連絡バス・路面電車を利用)
●路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩５分
●バス停「高知城前」下車、北へ徒歩５分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内１丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857